

# 人類の生きる道

藤井 日達

8

アメリカはベトナム戦争が泥沼のように抜き difficile できなくなつたところから焦つて、沖縄、小笠原をはじめ砂川周辺、横須賀、佐世保、板付、あらゆる所の軍事基地を利用し、ベトナム戦争を何とか勝ち抜こうとしております。そのため砂川の基地を拡張したいと考えております。

しかし、この軍事基地を造つて、日本がベトナム戦争に便宜を与えることは平和を求める世界の人々の考えにも反し、日本国のあるべき平和の姿にも反するので、これは何とか食い止めなければいけません。アメリカが戦争行為をやめればよいのですが、武器を売りさばくために、戦争行為はどうしても国の商売としてアメリカはやらねばならぬ

い。この頃またアラブ連合、イスラエルあたりでも戦争を計画しましたが、これは中東が戦争に飛び立つといつよりも、武器の一つの捌け口であり、商売相手であります。どこかにその武器を売りつけることが、大国の商売になつております。武器を必要な人が買うのですが、買った武器は人殺しに使われる。これが戦争となります。今日、戦争がやまないのは、大国が武器を造るから。そして日本もまた武器を造ります。それを海外にどんどんと売り出しております。武器は造つても食べられもせず、着られもしないから、戦争しない限りはストックになつてしまします。どうしても戦争をしなければならなくなります。それで戦争を

やめてしまおうといふことは、日本政府も反対であります。アメリカも反対であります。

日本の防衛は、諸国民の正義を信頼していくといふ憲法の条文はありますが、それを反故にして、日本国のお安全は武力によつて守らねばならないと考えております。よその国の武力が日本の武力よりも優れていれば、勝ち目がないから、アメリカの傘の下にいてアメリカの下で戦争をすれば、大変有利に戦争ができる。これは口実であります。武器をアメリカからもらつて、国内でも武器を造つて、それで日本国を安全にするなどといふようなことは、じつも信じられないことだと思います。

日本国は第一次大戦の時に、参謀本部の将校たちが「もう世界を相手にして戦争しても負けない」といふことを、はつきり断言して戦争にかかるのであります。そして、こんな敗戦をみました。

今、アメリカの仲間になつて、その傘の下で國のお安全を守る、といつよりも、このために土地を取られております。そして神聖なるべき科学者の研究は、アメリカの軍事援助を受けております。それは、これが直接人殺しになるか

ならないかは、日本の科学者は責任持たずになりますが、軍部から金をもらつものの研究の成果が軍事に使われないといつも、そらうことは成り立ちません。科学が危ないのも政治が危ないのも、みんな金に釣られた現代の日本国のおぼけた行き方の間違いからであります。

もう戦争は絶対に必要がないといふことは、日本国のお憲法が定めたばかりでなくして、世界の人の常識になつております。今、戦争をして得なことは一つもありません。ベトナムでひどい目にあつております。戦争をすれば、いつも良いことはありません。戦争をしなければ無事であります。

過日、戸嶋博士が私の教団の批評をしております。これは当たつているところもありますが間違いもあり、それを少し訂正したいと思います。

『宗教とナショナリズム』一三九ページ

「まず第一に、藤井は、日蓮の宗教を、文句なく平和主義として解釈しているが、それは正しいであろうか。敗戦の衝撃を受けて、再び日蓮の宗教を、軍国主義へ追いやるよ

9

うな事があつてはならない、とする藤井の護教的な善意は、われわれにもよくわかる。しかし歴史的事実まで、護教的な善意によつて曲げてはなるまい。歴史的事実に即していえば、日蓮には、藤井が遺産として受けついでいるような平和思想もあつたが、同時に戦前のテロリストをして快哉を叫ばせたような戦闘思想もあつたのである。日蓮におけるこの画面を、ありのままに正視した上で、日蓮を批判的に摂取する事が必要なのである。敬虔な藤井には、日蓮に対する、自主的な批判の精神がない。したがつて日蓮の宗教を、平和主義として解釈する場合でも、都合の悪い点が、故意に伏せられてゐるため、説得力を發揮していられないらみがある。何よりも日蓮は、鎌倉時代の人間であつたから、近代的な意味での軍国主義者でもなければ、また近代的な意味での平和主義者でもなかつた。

日蓮は『五戒と申すは、一には慈悲を起して物の命を殺さざる戒を、不殺生戒と名く。道理なき殺生を制する也』(戒法門)といつて、確かに不殺生戒を掲げていた。日蓮の主張がここで止まり、いつどんな場合でも殺生を禁じていたのならば、藤井の思想は、安んじて日蓮をよりど

こどする事ができます。ところが、日蓮は、今しがた言つているように、不殺生戒とは『道理なき殺生を制する』ことであつて、道理ある殺生まで禁じていたわけではない。もしされまでも禁じて、文字どおり、不殺生戒を守り通そつとすれば、日蓮は『尼夜殺生の悪人』と呼ばれた坂東武者を檀信徒とする事ができなかつたであろう。日蓮は、先のことばのすぐ後に續いて、次のようにいふ。『一を殺して、万を毒すべきをば許すべし』。つまり日蓮は、一を殺さなければ、万の生命があぶない時、その一を殺して、万の生命を助けろ、と教えていたのである。これは、日蓮によれば、道理ある殺生となる。決して日蓮は、不殺生戒の公式主義的な遵奉者ではなかつた。従つて、侵入者の恐るべき武器の前に並び立ち、合掌礼拝して、平和交渉にとりかかることを説く藤井の無抵抗主義は、日蓮に由来すると認められない。法華経も、全体の傾向としてみれば、勧持品、安樂行品、不輕品など無抵抗主義と認められない事はないが、譬喻品では不信誘法に対して、阿鼻頭獄の制裁を、また陀羅尼品でも、『頭被作七分』と説き、梵網經などに比較すると戦闘的な論調に溢れている。日蓮の折伏

思想は、法華経よりも、涅槃経に強く影響されている事について、私は、かつて指摘した事があるが、いずれにしても、日蓮を、無抵抗主義者とか絶対平和主義者とかいつて、一方的に規定できない。『相模の守殿こそ善知識よ。平の左衛門こそ提婆達多よ。念佛者は瞿迦利禪者、持齋等は善星比丘』(種種御振舞御書)という日蓮の側面は、確かに平和主義者といえよう。『信せん人は仏になるべし。誇せん者は毒鼓の縁となつて仏になるべき也』(法華初心成仏鈔)という日蓮は、憎しみを憎しみによってではなく、かえつて愛によって打ち勝つとした。日蓮の遺跡を自称する藤井が、自らの平和主義の根柢を日蓮に求めているのは、理由のない事ではない。『王地に生れたれば、身をば隨えられ奉るようなりとも、心をば、隨えられ奉るべからず』(撰時鈔)という日蓮を、非暴力主義者とみなすことも、充分可能である。しかし日蓮の教説は、単調な一元性だけでは貫かれていたといつてはいけない。だから前述のように、自分に対して迫害を加える説法を、毒鼓の縁として改値する反面があるかと思えば、譬喻品の阿鼻頭獄や、陀羅尼品の頭被作七分に対応するかのように、日蓮は、『建長寺、

寿福寺、極楽寺、大仏、長樂寺等の一切の念佛者、禪僧等が寺塔をば燒き払いて、彼等が頭を由比の浜にて切らはずば、日本國必らずほろぶべし』(撰時鈔)とか、『法華経の敵に成れば、此を害するは第一の功德と説き給つ也。況や供養を展ぶ可きをや。故に仙予國王は、五百人ノ法師を殺し、賞徳比丘は、無量の諸法者を殺し、阿育大王は、十万八千の外道を殺し給いき。此等の国王、比丘等は閻浮第一之賢王、持戒第一の智者也』(秋元御書)とかいつて、強硬な説法断罪論を吐いてゐるのである。日蓮を平和者とみなす場合、この種の説法断罪論の受け止め方を、当然問題としなければならないはずだが、藤井にはそれがない

こう戸頭さんが申します。一つを殺し多くを生かす、一殺多生は日蓮大聖人も仰せられてはおりますが、これは全く机上の空論、図上戦術の想定に似たものであります。多生といつ耳ざわりのよい言葉の裏に、殺生という門を開いてあります。殺生の門を一たび開けば多生は成り立ちません。多殺に移り行くことは必然であります。戦争はこれが起ります。

およそ戦争は都合のよし悪くして終結するものではありません。戦争は人の心の三毒の煩惱の極度の狂いであります。一つ殺すことは、一切の心の狂いに転化して三毒の煩惱を活動させます。一級多生などとして、一人を殺せば大勢が助かる。一人を殺せば万人が生きるといつも現実は古来どこの歴史にも見出されないことがあります。そんなことじつにありましたか。一人さえ殺せば、万人が皆生きていかれる。そんなことがありますか。古来からなかつたのです。道理ある殺生などは絶対にありえません。

中国で殷の紂王を討った周の武王は、君主を殺したわけですが、中国の歴史では、天に代わって罪を犯すものを討つたのだ。君主を討つのではない。こう言つておられます。こういうことを道理ある殺生と弁解するかも知れない。しかしながら、どの殺生をするときでも多勢のものを生かすためにも言ひ訳をします。そして天に代わって不義をうつと言わぬい人殺しまりません。

不殺生戒を犯すといつそのことが重大な罪悪であります。この前にはいかなる理屈も弁解も許されません。天に代わることもわまた認められない。

「ベトナムの平和を守るために」、いわく「自由諸国民の自由を守るために」等と、そんなことを申しております。日本国政府もこれに追随し、安保条約を盾にとて、ベトナム侵略戦争を侵略とは言はず、露骨にアメリカの侵略戦争に加担しております。世に道理っぽい恐ろしい凶器はありません。

不殺生戒は道理以上の道理であります。不殺生戒はいかなる道理によつても破壊されではありません。天に代わるものよりも優先して守らねばならない天の道であり、人間の本質であります。

それならば、日蓮大聖人が道理ある殺生と仰せられたのはどうしたことでしょうか。仏教の学問の上に、戒律というものに開闔の二面があります。止める方と、それからどこまでか融通をきかせることがあります。これはそういうことを示された文句であります。少しも不殺生戒の本旨に矛盾するものではありません。一級多生、道理ある殺生などは、決して日蓮大聖人の宗旨ではありません。こう私は言ふから、この文句をば無視してしまいました。日蓮大聖人様の宗旨でないものを取り上げる必要はない。

殺生という最も大きい罪悪の悲劇が、まだ一人対一人で行われた時代には、一人の悪いものを殺して多勢のものを生かすことも、天に代わって罪を打つと謳つて人殺しをすることがあります。それが社会に及ぼす害悪は、それほどおびただしくはなかつたかもしません。

しかもしも今日いやしくも殺生の門を開けば、あすは人類全滅の大火坑に陥ります。人類全滅を逃れんがためには、絶対無条件に不殺生戒を受持するよりほかに活路はない。すなわち人を殺さないこと、戦をしないこと、これ以外に人類の生きる道はありません。

すべて殺生をするものは、必ず道理をつけて飾らないものはありません。明治以来、日本国が幾度かの国際戦争も、いずれの時も自ら聖戦と称し、国民もそれがあるいは聖戦であるかと信じました。

アメリカは今日、ベトナムその他世界各地で国土の破壊無差別大量殺人を行つております。万国の人々が、いかにその侵略殺人の非道なことを非難しても、アメリカは平然として戦争を拡大して止まるところを知りません。そしてその戦争行為に道徳的な道理をつけております。いわく

一級多生、道理ある殺生といつ文句を私たちが無視しているから、私たちの無抵抗主義が日蓮大聖人に由来することは認められない、といつのもおかしい。かえつて一級多生の文句を、あたかも日蓮大聖人の宗旨のじく誤つて、日蓮大聖人の但行礼拝の宗旨を無視したから、こんな誤解を生じました。

「拝め」といつことがあります。「殺す」といつことでない。御義口伝といつ日蓮大聖人の御書があります。それに不輕菩薩の禮拝の住所を明かします。これについて十四個の礼拝住所のことが説かれています。「始めの一つの住所は世間の学者も知るところで、後の十三か所の礼拝の住所は、当世の学者の知らざることなり」と日蓮大聖人はおつしゃつております。いかに礼拝の住所を多方面から考えられたかわかりません。

一級多生の文句が、日蓮大聖人の宗旨ではなく、但行礼拝が日蓮大聖人の宗旨であることがわかれれば、闇へ着の前に合掌礼拝するといつことが、日蓮大聖人に由来するわけも認められねばならぬはずであります。

(本誌・昭和四一年七月増刊号より再録)